

「生きる」ことの意味

相模原障害者殺傷事件から二ヶ月が過ぎました。この事件は当初から加害者の精神科措置入院後の対策が問題視されましたが、事件の本質がそこにあるのではないことは大方の共通認識であると思います。私も心にとげが刺さったままのような気がしています。

この事件の背景には、一人ひとりに問われる大きな問題があるのではないのでしょうか。苦悩の多いこの世を、人は何故生きなければならないのか、その意味は何か、という問いです。

加害者は、人の手を借りなければ生きることのできない重度障害者は何の利益も生み出さず、意味のない人生であり、税金の無駄遣いだから抹殺するという。「・・・だから抹殺する」ということを認めていくと、老人、病人、中途障害者、発達障害者などが、どんどん排除されていき、そのあとに残る社会はどのような社会なのでしょう。次は自分が抹殺されるかもしれない社会なのです。そんな社会には絶対になってほしくはありません。

私たちの社会は、職業や立場、思想、能力、性格、人格、体質など実に様々な人々で成り立っています。医療従事者は病人やけが人がいなければ必要のない職業です。もめ事が無ければ弁護士も必要ありません。この世の様々な苦悩は、それを解決するために人々が持てる力を出し合って助け合い、その経験の中で共に学び、成長、発達していくことに意味があり、喜びがあると思うのです。

重度障害を生きている方たちから、どんなにわずかなことであろうとも経験、発達、成長、喜びを奪うことは、同時に介護している人のそれをも奪うことになるのです。障害児の近江学園を創った糸賀一雄氏が、「世の光をこの子らに」というお恵みの思想ではなく「この子らを世の光に」とした意味は何でしょうか。障害児、障害者がどのように発達保障をされているのかは、私たちの社会の在りようを表しているのです。重度障害児の発達保障ができる社会こそすべての人が幸せに生きられる社会なのだと言葉はいうのです。

想像してみてください。もしあなたの妊娠中の子どもが染色体異常（ダウン症など）と判明したなら、中絶しますか？悩んだ末に中絶した人は、先進国で90%に及ぶといわれます。もちろん、経済的な問題や社会福祉の貧困さなどの問題が、大きな影響を与えているとは思いますが、それでもなお、優生思想に洗脳された加害者の彼と私たちは、そう違わないところにいるのではないだろうか、と思うのです。これが、私に刺さったままの、心のとげなのです。

ルドルフ・シュタイナー（人智学）によると、自分の成長のために障害のある人生を生きる必要があると思っている魂が、相当な覚悟をもって縁のある家族のなかに、そして障害を持った肉体に宿る、といます。どんなに障害が重くても、その肉体に宿ることで得られる成長、発達があり、その経験を必要とする魂があるということは、どんな命も無駄な命はないということなのですね。

最後になりましたが、死さえ自分のものにできなかった19名の方のご冥福をお祈りします。

鈴木富美